

日本における Oliver Goldsmith の受容について

坂 本 武

序

Oliver Goldsmith (c. 1728—74) をイギリス18世紀の文学史の中においてみると、小説の分野では彼は、いわゆる四大小説家——Henry Fielding, Samuel Richardson, Laurence Sterne, Tobias Smollett——の次位に置かれ、演劇の分野では「風習喜劇」派のやや時代遅れの継承者であり、詩においては新古典主義からロマン主義への移行の端境期に単独者として立っている、といった具合に、時代の流れの中でも際立った様相を示す存在とは言えないかもしれない。にもかかわらず、その小説 *The Vicar of Wakefield* (1766) は刊行以来20世紀の今日まで広汎な読者に愛され、二つの劇作品、*The Good-Natur'd Man* (1768) 及び *She Stoops to Conquer* (1773) も根強い人気を保ち、その詩 *The Traveller* (1765) も *The Deserted Village* (1770) も今日なお様々な詩歌集を飾る佳篇である。しかも Goldsmith の才能は多彩なエッセイ群にも示されたのであり、有名な *The Citizen of the World* (1762) の他、ギリシャ史、博物誌、英国史等にもその対象は及んでいる。こうしたヴァリエティ豊かな作品を残した Goldsmith の決して長いとは言えない生涯はといえば、そのお人好しの性情、金使いの荒さ、言行の不一致といった数々の欠点と、それらを補って余りある愛すべき単純さと、大御所 Samuel Johnson の敬愛さえ受けた才筆ぶり、抗しがたいそのヒューマアの魅力等によって、あたかも一篇の物語を読む様な愉快さがある。わが国の Goldsmith 文献の中でもその辺りの事情をよく捉えたものに明治36年の浅野和二郎の次の様な文章がある。

「ゴールドスミスは誠に異彩を放てる剽軽物なり。筆を取りては錦心繡腸^{がいだ}咳唾皆珠を為すの趣あれど、その人相はヒョットコの面の如く、(中略) 詩人としては十八世紀の舞台に瀟歩するに足れど、当時の朋友間には愚物視せられ、機知には富みたれど、世才には飽くまでうとく、終生を素寒貧に送りて借金に首がまはらず、無数の失策をやり尽くして、そ

の癖虚飾の念はうせず、(中略)何が何やら分からぬ一生を送りて二十世紀の今日にまでもなほ愛読者の多くを維ぐ。」¹⁾

しかしながら、Goldsmith の文学的達成の全体像は、未だ十分に探究されているとは言えないのであって、われわれは今なお、例えば次の様な批評を認めざるを得ないのである。つまり、「彼は奔放な想像力も深遠な学識も持ったわけではないが、その作品は一種独特の魅力を具えているにかかわらず、ゴールドスミス の文学全体をまともに論じた批評家は一向にない」²⁾のである。このことを言い換えれば、Goldsmith が、それに対して総括的な批評的アプローチを試みようとするれば自ずと個別的なものに限らざるを得ないような、不可思議な魅力の混淆体として、依然われわれに訴えるものを持っていると言うことでもあろう。

ところで、こうした Goldsmith の魅力がわが国に伝えられて来たのは、いつ頃、どのようにしてであったのだろうか。そして、どのような影響をわが国の作家たちに与えたのであろうか。本稿では、わが国における Goldsmith の受容の諸相について、初期の関連資料を検討しながら覚え書き風にまとめてみたい。

I

外国の作家がわが国に受け入れられてゆく過程を一般的な現象として見れば、それは例えば翻訳によるものであり、あるいは教育現場における講義や教材を通してのものであろう。この場合、教材は広い意味で解説書や注釈の類も入っていると考えてよい。Goldsmith の場合も例外ではないが、後者の、言わば〈講壇の Goldsmith〉の特徴は、それが Walter Scott とともに「おそらく記録されたものではどちらも日本で講述された最初のもの」という榮譽を担っていることである。彼は言わば日本の英学の黎明期において英国の代表的な作家の一人と理解されていたのである。

Goldsmith がわが国の文献に初めて登場するのは、衣笠梅二郎「明治時代におけるゴールドスミス展望」によれば、明治4年(1871)の Samuel Smiles, *Self-Help* (1858) の中村正直による翻訳『西国立志編』においてであるとされる³⁾。同書第一編の第15項〈牧師の子より名を顕わす人〉の中に、Joseph Addison, James Thomson, S. T. Coleridge, Alfred Tennyson 等の英国詩人の名とともに、Goldsmith の名が挙げられているが、それは名前だけで、それ以上の言及はないものである。

ところで、豊田実『日本英学史の研究』によれば、『西国立志編』より早く、慶応3年(1867)に出た『英吉利会話編』中第24課に Goldsmith のギリシア史への言及があるという⁴⁾。『英吉

利会話編』についての同書の説明によると、これは「R. van der Pijl の初歩の英蘭会話」であり、「渡辺温による翻刻／ガラタマ先生聞」とある。「ガラタマ先生」とは誰か、調べはついていないが、渡辺温の方は「無尽蔵書齋主人」と号して『通俗伊蘇普物語』（明治8年）というイソップ童話の翻訳者としてもその名を残している。また「英蘭会話」とあるのは、じっさいは「英蘭」のうち英文のみを翻刻したものである。

いずれにしても、明治初年の頃においては Goldsmith の存在はまだ影のようなものである。その姿が主たる作品 *The Vicar of Wakefield* と共に登場するのは明治10年（1877）代で、而もそれは「工部大学校」という、東大工学部の前身とされる学校の歴史と関わっている点が注目される。先に、Goldsmith が Walter Scott と共に「日本で講述された最初のもの」と引用したが、その「講述」された場所とは「工部大学校」のことである。

菊池重郎「明治建築から見た英学」によると、明治10年の工部大学校史料をめぐる次のような記述が見られる。

「明治十年の規則では、アイルランド生まれのイギリス作家ゴールドスミス (Oliver Goldsmith) の *The Vicar of Wakefield* のようなイギリス名家の作品が講義され、散文と詩文の別を知らしめるためにスコット (Sir Walter Scott) の *The Lady of the Lake* つまり『湖上の美人』が講義されることが述べられている。おそらく記録されたものではどちらも日本で講述された最初のものと思われる。

英語教師としては、

工学校英語教授 英人 W. Craigie (明治六年七月)

英学博士 蘇国グラスゴー大学及第ウィリアム・ジ・デキソン (明治十年三月)

の名がみられる。」⁹⁾

工部大学校（1877～86）は明治3年（1870）山尾庸三（長州藩出身）により設置された「工部省」を基にした、最初の工業技術者養成機関である。「工部省」創設の翌年「工学寮」が設置されて後、「測量司」と合わせて明治10年（1877）に「工部大学校」と改称されたのである。わが国の文明開化を「殖産興業」の命題のもとに推進させた機関であり、そこにおける教授が、西欧の近代学問・技術・制度移入を目的として、いわゆる御傭外人教師たちによって行われたことは周知のことであろう。上記引用に見る W. Craigie も「ウィリアム・ジ・デキソン」もそのような例である。因にこうしたお雇教師の周旋に当たっては「ジャーディン・マディソン商会」が中心となって動いたという。工部大学校の歴史のそもそもの発端となったの

は、文久3年(1863)の長州藩五人男(伊藤博文・井上馨・山尾庸三・井上勝・遠藤謹助)の密航事件であるとされるが、その際彼らが乗り込んだ船が、同じジャーデイン・マディソン商会所有の「チェルスウィック号」(但し上海まで。ロンドンへはそこから他の船を乗りついで)だったというのも、日本の近代史の舞台裏のある部分をのぞかせて興味深い。密航に成功した彼らは先進国イギリスで多くのものを吸収し、やがて帰国して重要な仕事をなした。明治3年に工部省が出来た時の、初代工部卿(大臣)は参議の伊藤博文であり、山尾庸三はその下で「工部大輔」(次官)を勤める、といった具合であった。彼らがモデルにした教育制度がイギリスのカレッジ制度であったというのもうなづけよう。そして、外人教師の授業も当然英語で行われたのであった。

工部大学校における英語の授業風景について第一回卒業生曾禰達三(建築家)の次のような、先人たちの苦勞がしのばれる回想記がある。

「工部大学校の授業は英人が英語でしたのであるから生徒は其の講義を皆筆記した。然るに、英語を解すること未熟にして自然其の意味だけをノートに取るの余裕なく、唯判ったと思はるる所は斯くするも、然らざる所は殆んど書取同様に鉛筆を走らせ、加ふるに教師が黒板にスケッチする図も写し取らねばならないので、聴講中には却々叮嚀に筆記は出来ない。故に之を補足しノートブックに英文にて之を浄書する必要あり(ノートブックの英文を検閲して講義を理解せる乎否を試験せる教師もありたり)、広間にての夜間の勉学は主として此の聴講記の整理及浄書と宿題の答案の作成であった。」⁹⁾

工部大学校の歴史は、明治18年(1885)の工部省の廃止により文部省に移管され、翌年東京大学に合併されてその幕を閉じるのであるが、その卒業生の中には、工学寮時代には辰野金吾、工部大学校になると尾崎行雄、そして英語学者齋藤秀三郎といった、斯界の権威となる人材を排出させたのであるから、曾禰の回想には多少の誇張も含まれていると解すべきかも知れない。

工部大学校の外人教師のうちウィリアム・ジ・デキソン即ち William Gray Dixon について少しふれておこう。実は工部大学校の外人教師には二人の Dixon がいたのであって、しかも彼らは兄弟であった。William が兄、そして弟が James Main Dixon である。兄の Williamの方が先に来日して、明治6年から9年にかけての「工学寮」時代の3年間、英学を講じて後の工部大学校の英語の礎石を築いた。従って Goldsmith や Scott がその講義に取り上げられたのは正確にはこの3年の間ということになる。William は明治10年「工部大学校」となっ

て後の2年間も続けて在職して、やがて弟の James がその後を継ぐことになった。James は工部大学校が明治18年に帝国大学に合併されるまで、また合併されて後も勤続して明治21年(1888)には勲四等に叙せられた。先に名前を挙げた斎藤秀三郎は工部大学校時代の James の門下生中の俊才であり、文科大学に移ってのそれは岡倉由三郎であった。共に日本の英学の基礎を築いた学者であることは周知の通りであり、その英学の発展の根本はこうした Dixon 兄弟のような外人教師たちが支えたのであった。

James の業績の中心は、そのイディオム辞典 *A Dictionary of Idiomatic English Phrases specially designed for the use of Japanese Students* (1887) であろうが、他にも文法・作文の教科書も書いた。そして注目すべきことに、彼には Goldsmith についての著作さえあった。豊田実『日本英学史の研究』(昭和38年新訂版)に収められた「日本英学筑紫文庫目録」の1888年(明治21)の欄に見られる次の注釈書である。即ち、

[No. 139] James Main Dixon: Notes on Goldsmith's "Vicar of Wakefield".

Tokyo: Kyokkishosha.

という。これから察すると、兄の William に続いて弟の James も恐らく Goldsmith をその講義の中で取り上げたことは大いにあり得よう。否むしろ William 以上に James は、Goldsmith の作品と本格的に取り組んでいたと言えるのであって、James の講義にもそのことの反映はあったのではないかと予想させる。

II

われわれはこの James Main Dixon の存在を通して、Goldsmith のもっとも本質的な受容を考えさせる作家と出会うことになる。夏目漱石である。本質的な受容というのは、漱石晩年の〈則天去私〉の観念に対して Goldsmith が、Jane Austen とともに、関わっているとされることをもって言うのであるが、これについての議論は今ほ措いておかねばならない⁷⁾。

漱石と James の関わりは、漱石が明治23年(1890)「文科大学」に入学した時から始まると見てよい。明治18年(1885)に文科大学に移っていた James は、しかしながら夏目学生らを二年間教えただけで、明治25年(1892)には職を辞した。英文科の主任教授と一学生という関係であった二人の間は、残念ながらあまり幸福だったとは言えない。それはもう一人の James、即ち James Murdoch (漱石の第一高等中学校時代の英語・歴史の教師) との関係に比べていかにも不毛に見える⁸⁾。漱石が学習院で行った講演「私の個人主義」(大正3年)で

James の授業を批判的に回想したことは良く知られている。

「私は大学で英文学という専門をやりました。其英文学というものはどんなものかと御尋ねになるかも知れませんが、それを三年専攻した私にも何が何だかまあ夢中だったので。其頃はデクソンという人が教師でした。私は其先生の前で詩を読ませられたり、文章を読ませられたり、作文を作って、冠詞が落ちていると云って叱られたり、発音が間違っていると怒られたりしました。試験にはウォーズワースは何年に生れて何年に死んだとか、シェクスピヤのフォリオは幾通りあるとか、或はスコットの書いた作物を年代順に並べて見ろとかいう問題ばかり出たのです。年の若いあなた方にも略想像が出来るでしょう、果してこれが英文学か何うだかという事が。」⁹⁾

ここにはいわゆる文学青年の、無能（のように見える）文学教師に対するナイーブな反発の姿がある様だが、James の方は存外夏目金之助の英語力を高く買っていて、明治24年（1891）には『方丈記』の英訳を依頼し、それをもとに翌年「日本亜細亜協会」で“Chōmei and Wordsworth: A Literary Parallel”と題して講演を行ったりしている。

しかしながら、漱石の Goldsmith 理解の上で James が大きな役割を果たしたとは、残念ながら言うことは出来ない。James がその講義で取りあげた作家・作品は、漱石の上級生、立花政樹の回想によれば、Matthew Arnold, *Essays in Criticism*; *Lady of the Lake*; *Macbeth*; *Paradise Regained*; *Child Harold*; Sonnets 等であつたらしいが、これらを勉強していた夏目金之助の三年間は「何が何だかまあ夢中」で過ぎて行ったというのが事実であつたろう¹⁰⁾。

ところが、この夏目金之助自身が、英文科三年生の時に学費補給の目的で講師となった東京専門学校（現在の早稲田大学）で教材に使った一つが、*The Vicar of Wakefield* であった。漱石と Goldsmith の関係を考える上でこのことは注目してよい事実であろう。James に反発していた夏目学生が自ら教壇に立った時、彼の主体性の中に Goldsmith の作品世界は全的に吸収されていたであろうからである。

ここで、漱石が所有していた Goldsmith のテキストを参考までに挙げておこう。東北大学附属図書館に所蔵されている「漱石文庫」中の Goldsmith 資料は次の通りである。（目録番号も付しておく。）

1. *The Works of Oliver Goldsmith.*

Edinburgh: W. P. Nimmo, Hay, & Mitchell, [n. d.] 468p. 8vo.

Printed by Ballantyne, Hanson & co. /Edinburgh and London.

*N. B. (K. Natsume/Jan. 2, 1901) のサイン。Austen のものとほぼ同期。広告の
頁に [Jan. '98] の日付けあり。 —[漱/1. B/233]

2. *The Vicar of Wakefield.*

Edinburgh: Nimmo, 1874. 208p. 16mo.

With extracts from *The Deserted Village.*

*工部大学校の印あり。書き入れ, 傍線。 —[漱/1. B/234]

3. *Le vicaire de Wakefield.*

Paris: Garnier, [n. d.] 399p. 12mo.

*赤字による下線, 書き入れ多し。 —[漱/1. B/235]

4. *She Stoops to Conquer and The Good-Natur'd Man.*

London: Cassell, 1886. 191p. 24mo. 10×14.7cm.

(Cassell's National Library)

*英語の注多し。 —[漱/1. B/236]

5. *The Traveller and The Deserted Village.*

Ed. with introduction & notes by Arthur Barrett.

London & New York: Macmillan, 1888. 126p. 16mo. 11.3×16.8cm.

—[漱/1. B/237]

6. Goldsmith (O.) and Whitehead (P.) *The poems of Oliver Goldsmith and Paul Whitehead.*

Ed. with Prefaces, biographical and critical, by Samuel Johnson.

London: J. Buckland and others, 1790. 196p. 16mo.

(The Works of the English Poets. Vol. LXX.) —[漱/1. B/238]

以上のうち[1]の全集は, その日付から見ると英国留学中に買ったものである。『漱石研究年表』の1901年(明治34)1月2日の項には, 「British Museum (大英博物館) 西を通る Tottenham Court Road (トテナム・コート街) で89巻余りの書籍を購入する。Johnson の “British Poets” 75 vols. “Restoration Drama” 14 vols.」とある¹¹⁾。[6]の詩集も, 従ってこの時購入した中に入ったものであろう。[4]と[5]の購入時期は不明であるが, [3]の方は明治43年10月28日の日記に, 「昨日ギカーの仏訳来る。二三頁読む」とあるものの現物であろう。この仏訳も重要な資料だが, 英文科学生夏目金之助が最もよく読み込んだのは[2]のテキスト

であろう。その見返しに「工部大学校」の印が押されているこの十六折りの袖珍本には頁の最後に至るまで無数の細かな鉛筆による書込みと、読解の進行を示す「J」のマークがほぼ等間隔に最後まで続いている。夏目学生がどのようにしてこのテキストを自己の所有に帰せしめたかは謎であるが、[3]の仏訳への書込みと共に、漱石の Goldsmith に対する関心のあり方を暗示しているものである。

III

〈講壇の Goldsmith〉が説かれていたのは工部大学校だけではもちろんなかった。札幌農学校や同志社等においても Goldsmith はやはり重要な作家の一人として教材に取り上げられたのである。

札幌農学校における外人教師は W. S. Clark の他多数がいたが、中でも James Summers (1828—1891) が有名であった¹²⁾。Murdoch とも Dixon とも違う、この今一人の James は、もとロンドン大学キングズ・コレッジの教授で、明治6年(1873)来日して東京開成学校、新潟英語学校、大阪英語学校等で教えていた。明治13年に移った、この札幌農学校では彼は、Gray の *Elegy*, Macauley の *Lays of Ancient Rome* などの他に Goldsmith の *The Deserted Village* も取りあげて、訳読・暗誦・朗読・討論などの方法を試みた。彼の使ったテキストは F. H. Underwood, *A Handbook of English Literature* や A. Bain, *Rhetoric* であった。前者は明治初年に『オンドルワード英文学』の名で通っていたが、これは 'British Authors' と 'American Authors' とに分かれており、当時としては殆んど唯一の英文学関係の教科書であったようである。そして、同志社関係の記録にも明治13年頃のものとして、この『オンドルワード英文学』の名があるという¹³⁾。

明治初期の代表的教科書が『オンドルワード英文学』であったとすれば、明治中期において広く行われたのはスウィントン(Swinton)の『英文学研究』(*Studies in English Literature*)であろう。これを広めたのは、英語学習のための種々の雑誌と並行して一般読書界向けに出されていた「講義録」である¹⁴⁾。そのもっとも早い例は、明治25年の磯辺弥一郎の『英文学講義録』であるとされる。予定では全十巻より成る筈だったが明治27年の第七巻で終わったという。その内容は主として『スウィントン英文学』からとられ、第一巻にテニソンの『イーノック・アーデン』、スコットの『湖上の美人』、シェイクスピアの『ジュリアス・シーザー』とともに、Goldsmith の『荒村行』即ち *The Deserted Village* が収録されている。原詩・評注・解訳の三部に分けられた丁寧な編集である。以後、同種のものとして、明治32年の井上十吉『英語学講義録』、明治34年初出のイーストレーキの『イーストレーキ英語新誌』などが出版さ

れている。こうした流れは、大正10年に始まった研究社の「英文学叢書」シリーズ（主幹、東京帝大市河三喜・東京高師岡倉由三郎）に、おそらくは引きつがれて行ったものではあるまいか。同シリーズ中の Goldsmith の作品は、*The Vicar of Wakefield* と *The Good-Natur'd Man and She Stoops to Conquer* の二巻として出されている。この叢書の注釈のレベルの高さは、今日とても広く認められるところであり、なお隠然たる権威を示していると言える。

Goldsmith の作品を英語学習者のみならず、より広い読者層に解放したのは、言うまでもなく翻訳である。記録に残るもっとも早い例は、明治22年（1889）の植木貞次郎による *The Vicar of Wakefield* の訳、『家塾園乃咲分』(一)及び(二)で饗庭堂村の序文を付けて開新堂から出た。衣笠梅二郎氏の調査では、同じ書店から *The Vicar of Wakefield* の独学案内書として前橋考義訳述『翻譯第一篇村の花』というのが出ているという。こうした背景には、当時この小説の原書の翻刻本が三省堂から刊行され、それが教科書として広く行われたということがあった様である。それに対する参考書も上のような形で出たという訳である。

明治26年（1893）には博文館から *The Citizen of the World* の翻訳が上下二巻として刊行されている。表題は「英国 ゴールドスミス原著／日本羽化仙人訳述『翻譯歐洲巡遊通信』」とあり、上巻には28編、下巻には29編が収められている。「羽化仙人」というのは、わが国最初の英文学史とされる『英国文学史』（明治24年、博文館）の編者、渋江保のペンネームである。*The Citizen of the World* は昭和38年の『世界人生論全集5』（筑摩書房）に岡本圭次郎による抄訳が収められてもいる。

明治27年には大和田建樹による *The Deserted Village* の抄訳が『荒村』と題して『欧米名家詩集』（博文館）に収められている。

明治36年には浅野和三郎訳『ヴィカー物語』（大日本図書）が、巻頭に「ゴールドスミス評伝」を付して刊行されている。本稿冒頭にその一節を引用したものである。浅野和三郎は他にも『スケッチブック』や『クリスマス・カロール』を訳して、明治後期の英学生たちに裨益するところが大きかったという¹⁵⁾。

明治41年（1908）には水上夕波による *She Stoops to Conquer* の訳、『喜劇 かんちがへ』が出ているが、大正15年には福原麟太郎により『尺とり蟲』の題で新たに訳出された。

Goldsmith の翻訳は、この後も今日に至るまで様々な形で行われて来て、それらが Goldsmith の存在とその魅力をより広い読者層に知らしめてきたことは疑いないであろう。Goldsmith の受容のあり方の特徴は、わが国に英語が輸入されて間もなく講義の題材となり、教科

書として英学生の間広く読まれ、その翻訳も「家庭教育」のための教訓小説のように読まれた、といった点にあるであろう。おそらく『西国立志編』が明治期の青年の持した高い志に応えたのと同様の雰囲気、Goldsmith 理解の上でもいわば時代の空気として作用したのではあるまいか。この点から考えれば、夏目漱石の Goldsmith 理解がどうであったかは大きな問題点として残るであろう。そしてその問題は漱石以後の現代の作家達の Goldsmith 理解を考える上でも様々なヒントを与えてくれるにちがいない。

注

- 1) 衣笠梅二郎「明治時代におけるゴールドスミス展望」『光華女子大・短大紀要』第8集(1970), p.44 に引用。
- 2) 村上至孝『イギリス新古典主義の詩—ドライデンからクーパーへ』(研究社, 1973) 第5章「記述詩」, p.500。
- 3) 中村正直『西国立志編』の復刊本は講談社学術文庫に入っている。他に、柳田泉校訂『西国立志編』(富山房百科文庫18, 昭和13年), 大野一郎訳『自立心』(星文社, 1984), 竹内均訳『自助論』(三笠書房〈知的生きかた文庫〉, 1988)などの訳が出ている。
- 4) 豊田実『日本英学史の研究』(岩波書店, 昭和14年第一刷), p.365。『英吉利会話編』の「翻刻者」とある渡辺温については、森銑三の随筆「香亭雅談」の中に少しふれられている。中公文庫版『史伝閑歩』(1989)参照。
- 5) 『日本の英学100年』別巻(研究社, 1969), pp.105—108。なお、工部大学の歴史については、手塚竜磨『英学史の周辺』(吾妻書房, 1968)を参照した。
- 6) 『日本の英学100年』別巻, 同上。
- 7) 漱石と Goldsmith の関係を正面から論じたものに、大久保純一郎「漱石の則天去私と *The Vicar of Wakefield*」(『英語青年』1975年9月号)がある。後に日本文学研究資料叢書『夏目漱石Ⅱ』(有精堂, 昭和57年)に収録。*The Vicar of Wakefield*の方に重点を置いて同じ問題を論じたものに、相沢興一「*The Vicar of Wakefield*について—「則天去私」の文学」(長崎県立女子短大研究紀要, 第21号, 1974)がある。
- 8) 平川祐弘『漱石の師マードック先生』(講談社学術文庫, 昭和59年)参照。
- 9) 夏目漱石『文学ノート』(青春出版社, 1958)所収のものから引用。
- 10) 立花政樹の一文については、荒正人『漱石研究年表』(増補改訂版)(集英社, 昭和59年)の「明治二十三年(1890)九月十日(水)」の項に対する脚注を参照した。
- 11) 清水一嘉氏の「漱石とロンドンの古本屋」(『学鏡』1988年12月号)によれば、漱石がこの時「89巻余り」を買った「トテナム・コート・ロード」の古書店「ロチェ」は、1850年の創業で、その住所は「ニュー・オックスフォード・ストリート38番地」であったという。荒正人が「不明」とした店である。
- 12) 『日本の英学100年』明治編(研究社, 1968), pp.432, 490。
- 13) 重久篤太郎『明治文化と西洋人』(思文閣出版, 昭和61年)所収「『同志社文学』の背景」, p.177。
- 14) 『日本の英学100年』明治編, pp.490—91。
- 15) 「馮虚」と号した浅野和三郎の翻訳『ヴィカー物語』は明治36年7月30日の発行となっているが、同年の9月15日にはもう再版が出されるほどの人気だったようである。当時の定価は金五拾五銭。発行兼印刷者は「東京市京橋区銀座一丁目二十二番地 大日本図書株式会社」である。同書に付された広告頁の中に、浅野和三郎による他の翻訳二冊、「標註スケッチ・ブック」及び「標註クリスマス、カール」

の表題が見える。『ヴィカー物語』でも標註（頭註）が施され、それにより翻訳と注釈の両方の機能を果たすよう意図されている。またこの翻訳では、登場人物名はすべて日本風に翻案されているのが興味を引く。当時流行した形式である。次にリストを掲げておく。

| | |
|-----------------------|-------|
| Dr. Primrose | 古室博士 |
| George | 讓次 |
| Olivia | 折葉 |
| Sophia | 小宮 |
| Moses | 茂七 |
| Arabella | 美代子 |
| Burchell | 栗地 |
| Thornhill | 針岡 |
| Sir William Thornhill | 針岡維廉卿 |

そして Wakefield は「通夜野」である。